

## マルコによる福音書 10 章 35 節～45 節

2017 年 6 月 22 日

古本 靖久

1、聖歌 413 番 「思いやりの 心そなえ」

2、お祈り

3、聖書輪読 （新約聖書 82 ページ）

4、テキストの位置

先月の場面では、イエス様が先頭に立ちエルサレムへと向かう姿が描かれました。エルサレムとは十字架の場所であり、受難の地です。

そこでイエス様は、三度目となる受難予告を弟子たちに対しておこないます。

ユダヤへ	10:1-12	律法のとらえ方
	10:13-16	子どもを来させる
	10:17-22	金持ちの男
	10:23-31	神の国に入るには
	10:32-34	第三回受難予告
	10:35-45	仕える者となりなさい
	10:46-52	目が見える

しかし 12 弟子のメンバーであるゼベダイの子ヤコブとヨハネがイエス様にとんでもない願いを申し出ます。これまでも繰り返し報告されてきた「無理解な弟子」の姿がそこにはあります。

5、節ごとに

◆仕える者となりなさい

10:35 （そして）ゼベダイの子ヤコブとヨハネが進み出て（やって来て）、イエス（彼）に言った（う）。「先生、（わたしたちが）お願いすることをかなえていただきたいのですが（ください）。」

三度目の受難予告を聞いた直後、ゼベダイの子であるヤコブとヨハネがイエス様の元にやって来て、何かを願うようです。原文通りだと、「あなたが行うようにと、わたしたちは欲する」という言い方になります。

10:36 イエス（彼）が（彼らに）、「何を（あなたたちに）してほしい（と言う）のか」と言われると、

多分、二人の願いがどのようなものか、イエス様は何となく分かっていたことでしょう。わたしたちが小さい子の「お願い」を聞かされるときも、十中八九、ろくなことはありません。イエス様も同じように、覚悟していたと思います。

しかしイエス様は、彼らの言葉をさえぎることなく耳を傾けます。とんちんかんな願いでも、まず耳を傾けるイエス様の姿は、わたしたちに安心を与えてくれます。

10:37 二人（彼ら）は（彼に）言った。「（あなたの）栄光をお受けになるとき（の中で）、わたしどもの一人をあなたの右に、もう一人を左に座らせてください。」

彼らの願いは、イエス様の栄光の中に自分たちも引き上げてください、というだけにとどまりませんでした。二人の兄弟のうち一人をイエス様の右に、もう一人をイエス様の左に座らせてほしいと言うのです。

ひな人形の中に、右大臣・左大臣という人形があります。ちなみに調べてみますと、左大臣の方が偉いそうです。聖書では、右の座は「名誉の座」と呼ばれ、側近の中で一番重要な場所です。そしてその次に重要なのが左の座です。つまりナンバー2とナンバー3に就任させてほしいというのが彼らの願いでした。

マルコ福音書に出てくる12人の弟子のうち、フィリポ、バルトロマイ、マタイ、トマス、アルファイの子ヤコブ、タダイ、熱心党のシモンの7人は、マルコ福音書の中では3章にある12弟子の紹介のときにしかでてきません。

一方、イスカリオテのユダは14章の「裏切りの場面」になると多く出てきます。またペトロの兄弟アンデレは、最初の召命物語に登場します。しかしマルコ福音書の中で圧倒的に登場回数が多いのはペトロです。そして次によく出てくるのが、ヤコブとヨハネの兄弟です。

彼らはペトロたち同様、漁をしているところにイエス様がやって来て、弟子になりました。イエス様はペトロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけを連れていくことができました。ヤイロの娘を生き返らせたとき、山の上でイエス様の姿が変わったとき、ゲツセマネでお祈りしたとき。

彼らはイエス様のすぐそばにいて、イエス様がおこなうことを間近で見てきたはずです。しかしイエス様を受難に向かっているそのさなかに、自分たちのことだけを考えている弟子の姿がそこにはあります。

マルコ福音書が書かれた頃には、ヤコブはすでに殉教していました。ヨハネは12弟子の中で唯一殉教しなかったと伝えられますが、ヨハネ福音書やヨハネの手紙の作者とされていたり、イエス様が一番愛した弟子と考えられたりしていました。

おそらく福音書が書かれた時代には、教会の中で「英雄視」されていた二人が、こんなレベルの質問をイエス様にしていた。この事実は教会という組織の中では、歓迎されないものだったことでしょう。

事実マルコ福音書を参考にしながら書かれたマタイとルカ福音書では、この物語の描かれ方が変わっています。まずマタイ福音書ではイエス様にこのようなことを願うのは、ゼベダイの子らの母親になっています。そしてルカ福音書には、この話自体が載せられていません。

しかしマルコ福音書は、あえてわたしたちに伝えます。イエス様のお話を毎日聞いて、教会の中心人物となっていくような人でも、支配欲や地位に対する欲望からは逃れることができないということ。

10:38 (しかし) イエスは(彼らに) 言われた。「あなたがたは、自分が何を願っているか、分かっていない。このわたしが飲む杯を飲み、このわたしが受ける洗礼を受けることができるか。」

話の流れからすると、杯と洗礼とは受難の比喩だと考えられます。旧約聖書の中で杯は、神さまの怒りや憤りをあらわすものとして使われており、新約聖書の最後の晩餐では、イエス様が十字架上で流す血の象徴として描かれます。

また洗礼の語源である「バプテスマ」という語の動詞形には、「溺死させる」や「滅びる」という意味も持ちます。

つまりイエス様は二人に、本当にあなたたちはわたしと同じ受難の道を歩くことができるのかと問いかけるのです。

10:39 彼らが(彼に)、「できます」と言うと、イエスは(彼らに) 言われた。「確かに、あなたがたはわたしが飲む杯を飲み、わたしが受ける洗礼を受けることになる(だろう)。

すぐに「できます」と言っているところを見ると、二人には本当の意味は分かっていないのでしょう。しかしイエス様に従う彼らが、受難の道を歩むことは決まっていたことでした。

10:40 しかし、わたしの右や左にだれが座（らせ）るか（の）は、わたしの決める（が許す）ことではない。それは、定め（備え）られた人々に（のみ）許されるのだ。」

だれが高められ、だれが低くなるのか。それはイエス様が決めることではありません。というよりも、イエス様はそんなことに興味がなかったのかもしれませんが。

この後半部分は、二通りに読むことができます。第一は神さまがそのように備えた人々のみ、地位を与えられるという意味です。そして第二は、ヤコブやヨハネではなく、他の誰かがその地位のために備えられているという意味です。

いずれにせよここで言われているのは、神さまの決定に対して、イエス様はただ従うだけだということです。すべてを決めるのは神さまだけです。栄光の中に入るのも、イエス様のそばにいるのも、すべては神さまのみ心次第なのです。

10:41 （そして）ほかの十人の者はこれを聞いて、ヤコブとヨハネのことで腹を立て（憤り）始めた。

10 人の者とは、ゼベダイの子ヤコブとヨハネを除いた残りの弟子たちです。彼らは憤っています。強い怒りを覚えているのです。それは一体なぜなのでしょう。

それは自分たちだって、栄光のイエス様のすぐそばにいたいと考えていたからではないでしょうか。先を越された。抜け駆けされた。そのような思いがあったのかもしれませんが。

10:42 そこで、イエスは一同（彼ら）を呼び寄せて（彼らに）言われた（う）。「あなたがたも知っているように、異邦人（諸民族）の間では、支配者と見なされている人々が（は）民を支配し、偉い（大いなる）人たちが権力を振るっている。

ここで新共同訳聖書では、「異邦人」という言葉を用いています。しかし聖書の中で異邦人という言葉は、ユダヤ人と対比させて使われます。そうすると異邦人社会では支配者が権力を振るっているが、ユダヤ人社会ではそうではないというようになります。

異邦人と訳された語は「諸国民」とも訳せます。諸国民と訳すと、「すべて人間の間では」という意味になります。つまりユダヤ人であろうともなかろうとも、そのような支配の構造があることを、イエス様は指摘されます。聖書は徹底的に、人間の弱さを描きます。どれだけイエス様の近くにいても、弟子たちでも、そしてどんな人間でも、人間的な欲求から逃れることなどできないのです。

10:43-44 しかし、あなたがたの間（中）では、そうではない。あなたがたの中で偉く（大きい者と）なりたい者は、皆（あなたたち）に仕える者になり、（そしてあなたたちの中で）いちばん上に（第一者に）なりたい者は、すべての人の僕（奴隷）になりなさい。

イエス様が一度目の受難予告をしたとき、ペトロはイエス様を脇に連れ、いさめました。そのときにイエス様はこのような言葉を語りました。

「わたしの後に従いたい者は、自分を捨て、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのため、また福音のために命を失う者は、それを救うのである」。

また二度目の受難予告のあと、弟子たちは誰が一番偉いかを語り合っていました。その彼らに向かって、イエス様はこのように言いました。

「いちばん先になりたい者は、すべての人の後になり、すべての人に仕える者になりなさい」。

そして今回、三度目の受難予告のあと、ヤコブとヨハネの願いを聞いたあとに言われたのが、この節の言葉です。

自分を捨てる、すべての人の後になる、すべての人に仕える人になる、すべての人の奴隷になる。何度も、何度も、イエス様は繰り返し語られます。そして聖書は、何度語られても そうすることのできない弟子の姿を伝えます。

自我を捨てる、無になる。言葉で言えば、簡単です。しかし現実的にそのようなことが出来ないのです。弟子たちの姿を見せられて、わたしたちはそのことに気づかされるのです。



10:45 （なぜならば）人の子（が来たの）は仕えられるためではなく仕えるために（であり）、また、多くの人（のための）身代金として自分の命を献げる（与える）ために来たのである。」

仕えるために来た。その言葉からは、下から支えるイエス様のイメージが浮かび上がります。ヤコブとヨハネはイエス様が栄光の中に入ったときには、頭上で光り輝くようなイメージをもったかもしれませんが。しかしイエス様はそうではなく、人々の泥だらけの足もとで、その足を洗う方なのです。

身代金という言葉は、旧約聖書に多く出てきます。罪の代償として支払われるお金、支払わないと奪われる命の代償金、近親者の自由を買い取るために親戚によって支払われる代金、初子の犠牲に相当するものとして支払われる代金、奴隷や捕虜を解放するためのお金など、聖書の中ではさまざまに用いられています。

この箇所から、イエス様の十字架の意味を読み取ることもできるかもしれません。元々わたしたち人間は悪魔的な力にとらえられ、罪の奴隷になっていました。ところが神さまはそれを良しとはされず、人間を罪のもとから買い戻そうと考えられたわけです。

それには「身代金」を支払う必要がありました。その身代金こそが、神の子であるイエス様の命なのです。これが「十字架の贖い」です。

### <今日の箇所から>

昔、黙想指導をしてもらったことがありました。わたしたちは黙想というと、心を無にして座禅を組むというイメージをもつかもありません。しかしそのときの黙想は違いました。心の中に余計な思いが現れたとしても、それを受け入れなさいと言われるのです。

たとえばじっと静かにしていると、お腹が空いてくる。ふとラーメンの映像が、頭の前を通り過ぎていく。そのときに無理に頭を振って、その映像を消さなくてもいいというのです。そうではなく、「ああ、今、自分はラーメンに心が移っているんだなあ」ということを、客観的に眺めながら認める。

わたしたちが聖書を読むとき、2000年前の弟子たちと同じような心境になっている自分に気づくことがあります。イエス様に関わる人々のように、イエス様を受け入れられず、その十字架の意味が理解できないことも多くあります。

そのときに「これではダメだ」と頭を振り続ける必要はないのです。自分もそのような考えを持っているのだということを認め、自分の現実を受け入れる。その上で、神さまからの憐れみを求めるのです。

イエス様はわたしたちの元に来て、共に歩んでくださいます。それはわたしたちが罪の中から解放されるように、そしてわたしたちが歩き疲れ、倒れたときに、身体を支えてくださるために。イエス様に委ね、歩んでいきましょう。

今回の学びはこれで終わります。次回は7月27日(木)10時30分からです。「目が見える」(マルコ10:46~52)について学んでいきます。